

マケドニア王家とオリュンピア祭

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤田, 典子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008929

マケドニア王家とオリュンピア祭

澤 田 典 子

はじめに

ギリシア北辺の一小王国にすぎなかったマケドニア王国は、フィリポス2世(在位前360/59～336年)のもとで急速に台頭し、前338年にはカイロネアの戦いを制して、ギリシア世界の覇者の地位にまでのぼりつめるに至った。即位から20年足らずでそうした偉業をなしとげた鬼オフィリポス2世は、ギリシア征服に乗り出してまもなくの前356年、ギリシア人の民族的祭典であるオリュンピア祭に参加し、騎馬競走の種目で優勝を果たしたことが知られている。

前360/59年のイリュリア人との激戦で戦死した兄王ペルディッカス3世(在位前365～360/59年)の後を受けてフィリポス2世が即位したとき、マケドニア王国は存亡の危機に瀕していた。イリュリア人はさらに大軍を集結してマケドニアへの進撃をはかり、パイオニア人もマケドニアの領土への侵入を開始し、国内ではアルガイオスやパウサニ阿斯をはじめとする王族たちが王位獲得を狙って続々と名乗りをあげた。そうしたまさに四面楚歌とも言うべき状況のなかで即位したフィリポス2世は、政略結婚や買収工作などの懐柔策を駆使して内外の数多くの脅威をそらし、直ちに軍隊の育成にとりかかった。その後1年以内にパイオニア人、イリュリア人との戦いに大勝して国境を固め、前357年には、アテナイとの争いの焦点になっていたエーゲ海北部の要衝アンフィポリスを獲得してギリシア征服の好スタートを切ったのである。翌前356年初頭、テルマイコス湾に面した海港都市ピュドナを陥落させ、さらに同年夏にはカルキディケ半島の有力都市ポテイダイアの占領にも成功し、マケドニア周辺地方に着々と支配領域を拡大していった。

フィリポス2世がオリュンピア祭での勝利という大きな榮譽を勝ち得たのは、まさに、治世初期のそうした精力的な軍事作戦のさなかのことであった。この勝利について、プルタルコスは次のように伝えている(Plut. Alex. 3.8)。

ポテイダイアを占領したフィリポスのもとに、3つの報告が同時に到着した。イリュリア人がパルメニオンによって大激戦の結果敗れたこと、オリュンピア競技の騎馬競走で勝利を得たこと、そして、アレクサンドロスの誕生であった。

これら3つの吉報が、プルタルコスの伝えるように全く同時にフィリポス2世のもとに届いたということに関しては、疑問視する見解が多い。しかし、王子アレクサンドロスの誕生は前356年の7月20日頃、將軍パルメニオンによるイリュリア戦の勝利は同年8月、そしてこの年のオリュンピア祭（第106回）は8月下旬と考えられるので¹、これらの出来事が同じ一夏に相次いで起こったことは確かであろう。重臣パルメニオンに長年の宿敵イリュリア人との戦闘を任せ、自身はポテイダイア戦で奮闘していたフィリポス2世は、王位に就いて初めてのオリュンピア祭である前356年夏の祭典に持ち馬を送り込み、馬主として見事優勝をとげたのである²。フィリポス2世の名前は、この年のオリュンピア祭の優勝者リストに記されており、マケドニア王としてオリュンピア祭で優勝したことが確実な最初の例とされている。フィリポス2世はこの輝かしい勝利を記念して、表にゼウス神の頭部、裏には勝者のリボン^{リボン}を頭に巻いた馬上の騎手を刻した銀貨を発行した³。

プルタルコスは、続いて「フィリポスはオリュンピアでの戦車競走での勝利（複数形）を貨幣に刻印させた」（Plut. *Alex.* 4.9）とも伝えており、フィリポス2世は、その後のオリュンピア祭の戦車競走においても一度ならず勝利をおさめたい。これらの勝利は、前352年と前348年の祭典と推測されている⁴。表にアポロン神の頭部、裏に二頭立ての戦車に乗った御者を刻したフィリポス2世の有名な金貨「フィリペイオイ」は、プルタルコスの伝えるこれらの戦車競走での勝利を祝して発行されたものと考えられている⁵。

精力的な軍事作戦を繰り返して、ギリシア世界の各地を転戦しながらも、全ギリシア的な聖地オリュンピアで開催されるギリシア人の民族的祭典に並々ならぬ関心を示し、持ち馬や戦車をたびたび送り込んだフィリポス2世は、前338年にカイロネアの戦いを制してついにギリシア世界の覇者となったのち、オリュンピアの神域の一角に「フィリペイオン」と呼ばれる瀟洒な円形堂^{トロン}を建立している。神域の目抜き場所に建立されたフィリペイオンの内部には、当代随一の彫刻家レオカレスの手になる、フィリポス2世自身を含む家族5人の黄金象牙造りの立像が安置されていた、とパウサニアスが伝えている（Paus. 5.20.9-10）⁶。

治世を通じてオリュンピアに大きな関心を寄せたフィリポス2世が、その征服活動において、もうひとつの全ギリシア的な聖地デルフォイとの絆を盛んに喧伝したこともよく知られている⁷。デルフォイとの絆というギリシア世界における政治的プロパガンダの重要性をフィリポス2世が十二分に認識してギリシア征服を進めていったことは、同盟締結にあたってのデルフォイのアポロン神の神託の重視⁸、デルフォイのアンフィクティオニアの陣営にくみしての第三次神聖戦争（前356～346年）への介入、その後のアンフィクティオニアへの加入、第四次神聖戦争（前340～339年）においてアンフィクティオニアの軍の最高司令官に就任したことなどから明らかである。デルフォイと密接な関係にあるテーベで少年時代の3年間を人質として過ごしたフィリポス2世は、そうしたデルフォイとの絆の強調がギリシア世界に勢力を伸長させていくうえで重要な手段となることを、身をもって学んだのかもしれない。

デルフォイとの絆を積極的に活用したことが知られるマケドニア王はフィリポス2世が最初であるが、オリュンピアとマケドニア王家の「関わり」は、フィリポス2世よりも1世紀以上前のアレクサンドロス1世の治世（前497頃～454年頃）にさかのぼる。前7世紀に建国されたと考えられるマケドニア王国が、現存するギリシアの文献史料に初めて登場するのは、アレクサンドロス1世の父アミュンタス1世の治世（?～前497年頃）で、前6世紀後半の彼の治世の出来事に関するヘロドトスの断片的な記述が残っているが、ある程度のまとまった情報が得られるのは、アレクサンドロス1世の治世になってからである。ヘロドトスは、ペルシア戦争の背景や展開を語りながらマケドニア王国について触れ、アレクサンドロス1世の行動に関するかなり詳しい記述を残しているが、そうした記述のなかに、アレクサンドロス1世がオリュンピア祭のスタディオン走に出場したという記事（Hdt. 5.22）がある。ギリシア人（ヘレネス）だけの祭典であるオリュンピア祭において、ギリシア世界ではバルバロイと見なされていたマケドニア王の参加が問題とされる一幕があったことを伝える有名なエピソードである。

アレクサンドロス1世は、フィリポス2世より1世紀半近くも前にオリュンピア祭への参加を果たしたのだろうか。アレクサンドロス1世はフィリポス2世の「先駆者」だったのか。ヘロドトスの伝えるアレクサンドロス1世のオリュンピア祭参加が史実であるかどうかをめぐっては様々な議論があり、おそらく参加は事実であろうとする見解が有力であるものの、細かい解釈や参加の年代など、意見の一致を見ない問題が多い。

本稿では、治世を通じて見られるフィリポス2世のオリュンピアに対する強い関心の背景を解明する一助として、フィリポス2世の「前例」だったとされるアレクサンドロス1世のオリュンピア祭への参加をとりあげる。参加についてのヘロドトスの記事は事実であるのか、参加したとするとそれはいつのことか、という問題を整理し、さらに、その「参加」はマケドニア史の文脈においてどのような意味を持つのかについても若干の考察を試みたい。

I 史料について

ヘロドトスは、アレクサンドロス1世がオリュンピア祭に参加した一件について、以下のように伝えている (Hdt. 5.22)。

ペルディッカスに発するマケドニア歴代の王が、ギリシア人であることは、彼らが自称していることであるが、私自身もそのように承知しており、彼らのギリシア人であることを後章でも証明するつもりである。のみならず、オリュンピア競技を主催する役員たちも、その事実を認定したのである。というのは、アレクサンドロスが競技に参加したいという望みを起こし、その目的でオリュンピアにきたときのことであるが、相手の走者となるはずのギリシア人たちが、この競技はギリシア人だけのためのもので、^{ヘルパロイ}異国人の競技者のためのものではないといて、アレクサンドロスを除けようとした。しかしアレクサンドロスが、アルゴス人の血統であることを証明して見せたので、ギリシア人であると判定され、競走(スタディオ^{ヘラノディカイ}ン走)に参加して、第一位の者と互角の成績をあげた。そのようなことがあったのである⁹。

この記事には、自らがアルゴス人の血統であることを証明したアレクサンドロス1世が、ギリシア人だけの祭典であるオリュンピア祭の参加を許された、とあるが、その「アルゴス人の血統」とは、ヘロドトスが「後章でも説明するつもり」と言っているように、第8巻で詳述されているマケドニアの建国伝説 (Hdt. 8.137-139) に現れる「血統」である。その建国伝説によれば、ギリシア神話の英雄ヘラクレスの子孫であるテメノスの末裔の三兄弟がアルゴスからマケドニアの地に流れ着き、三兄弟の末弟ペルディッカスがマケドニアの王位を手中にした、という¹⁰。このペルディッカスは、アレクサンドロス1世から数え

て7代目の祖先にあたとされる。アレクサンドロス1世は、こうした系譜をオリュンピア祭という場で語ってみせ、それが承認されて参加を許された、ということになる。

なお、アレクサンドロス1世のオリュンピア祭参加に関連するとされる史料は、他に、前5世紀前半の抒情詩人ピンダロスの断片と、後3世紀のユスティヌス（前1世紀のポンペイウス・トログスの『フィリポス史』の抄録）の一節がある。「アミュンタスの子アレクサンドロスのために」と題するピンダロスの頌歌の断片には、次のように詠われている（Pind. fr. 120-121）。

幸せなダルダニダイと同名の人よ、
アミュンタスの子にして、大胆な企ての男よ。
……よき人々は……うるわしい歌で……
讃えられることがふさわしい。
それだけが不死の誉れに達しうる。
うるわしい功績も、語られなければ、滅びるのだ。

またユスティヌスは、「アレクサンドロス（1世）にはすべての能力が生来の誉れとして備わっていて、オリュンピアの競技にさえもいろいろな種目で活躍したほどである」（Just. 7.2.14）と記しており、これらの記事をヘロドトスが伝えるアレクサンドロス1世のオリュンピア祭での勝利と関連づける見解もある¹¹。

こうした史料をもとに、アレクサンドロス1世のオリュンピア祭参加をめぐる問題とされてきたのは、アレクサンドロス1世が実際に参加したのか、そして、参加したとすればそれはいつのことか、という点である。現在のところ、参加の事実を最も強く否定するのはBorzaで、多くの研究者はヘロドトスの言及をほぼ受け入れ、若干の疑問点は残るものの参加はおそらく事実であろう、という見解に落ち着いている¹²。Borzaは、このオリュンピア祭参加の記事のみならず、マケドニアの建国伝説も含め、アレクサンドロス1世に関わるヘロドトスの記述の多くは、ペルシア戦争後に親ギリシア的姿勢をアピールしてギリシア世界に参入していこうとしたアレクサンドロス1世がヘロドトスに吹き込んだ一連の作り話であり、ヘロドトスはアレクサンドロス1世のスポークスマンとして、マケドニア王家のプロパガンダをギリシア中に広める役割を果たした、と論じている¹³。

アレクサンドロス1世のオリュンピア祭参加を伝えるヘロドトスの記事の検

討に入る前に、まずは、アレクサンドロス1世に関するヘロドトスの記述全般の信憑性について触れておきたい。

II アレクサンドロス1世についてのヘロドトスの記述

ヘロドトスの『歴史』のなかで、マケドニア王国はペルシア戦争の展開において付随的にしか登場しないが、アレクサンドロス1世の行動は異例に詳しく記されている。アレクサンドロス1世の時代のマケドニア史を研究するにあたっては、ヘロドトスのそうした記述がほぼ唯一の同時代の文献史料であり、ヘロドトスとアレクサンドロス1世の関連について論じた研究も多い¹⁴。

アレクサンドロス1世に関する記述が極めて詳細であることから、まず問題とされてきたのが、ヘロドトスは実際にマケドニアを訪れてアレクサンドロス1世と会ったのか、という点である。アレクサンドロス1世に関する詳しい情報をヘロドトスはどこで入手したのか。ヘロドトスの記述の信憑性を考える前に、まずこの点について触れておきたい。

ヘロドトス自身は、『歴史』のなかで、マケドニアを訪れたという記述を残しておらず、彼がマケドニアに滞在したことを示す直接的な証拠はない。しかし、ヘロドトスはおそらく前450年代にマケドニアを訪れ、アレクサンドロス1世と実際に会ったとする見解が、ほぼ通説になっている¹⁵。そうした通説の根拠としては、アレクサンドロス1世についての記述の異例の詳しさに加え、ヘロドトスがマケドニアに関するエピソードを語る際に用いている「マケドニア人の伝えるところによれば」(Hdt. 7.73)、「マケドニア人の伝説によれば」(Hdt. 8.138.3)というフレーズの存在があげられている。

また、ヘロドトスはドドナ、タソス、テンペ峡谷といったマケドニアをとりまく地域を実際に訪れているが(Hdt. 2.52-53, 6.47, 7.129)、このことも、ヘロドトスのマケドニア訪問の傍証になるであろう。さらに、エジプトや小アジア、メソポタミアなど多くの遠隔の地を訪れたヘロドトスが、その調査旅行の過程でマケドニアを訪れなかったとは考えにくいと思われる。これらはいずれも状況証拠にすぎないが、ヘロドトスは実際にマケドニアを訪れてアレクサンドロス1世と会い、ペルシア戦争中のアレクサンドロス1世の行動を中心としたマケドニア王国についての詳しい情報を現地ですぐに入手した、と考えるのがやはり妥当であろう¹⁶。

そうした情報に基づいて書かれたアレクサンドロス1世についてのヘロドト

スの詳しい記述は、以下の7つのエピソードに分類できる。

- ①前 510 年頃、ペルシアの將軍メガバゾスがマケドニアに7人の使節を派遣して臣従を要求し、その使節団が即位前のアレクサンドロス1世によって殺害された事件 (Hdt. 5.17-21)。
- ②(①の長いエピソードのすぐ後に)本稿で扱うアレクサンドロス1世のオリュンピア祭への参加 (年代については記述なし) (Hdt. 5.22)。
- ③前 480 年春、テンベ峡谷に布陣するギリシア軍に、アレクサンドロス1世が使者を送って撤退を勧告した事件 (Hdt. 7.173)。
- ④前 480 年のテルモピュライの戦い後、アレクサンドロス1世がボイオティアの都市にマケドニア兵を配置してボイオティアを救った事件 (Hdt. 8.34)。
- ⑤前 480 年のサラミスの海戦後、ペルシアの將軍マルドニオスがアレクサンドロス1世をアテナイに使節として派遣した一件 (Hdt. 8.136,140-144)。
- ⑥(⑤のエピソードのなかに挿入された)マケドニア王国の建国伝説(Hdt. 8.137-139)。
- ⑦前 479 年夏のプラタイアの戦い前夜に、アレクサンドロス1世が夜更けに自らアテナイの陣営に現れ、アテナイの指揮官たちにマルドニオスの計画を伝えた事件 (Hdt. 9.44-45)。

これらの記事については、①に関する Errington の詳細な研究と、全てのエピソードに関する Borza の研究があるが、森谷公俊氏の論考が両者の見解を手際よく整理している¹⁷。これらひとつひとつのエピソードの信憑性を問うことが本稿の目的ではないので、詳細は森谷氏の論考に譲り、ここでは要点だけにとどめたい。

①②⑥⑦の記事をアレクサンドロス1世自身の作り話とする Borza は、これらのエピソードは、ペルシア戦争中に親ペルシア的な行動をとっていたアレクサンドロス1世が、戦後、ギリシア世界に対して自身の親ギリシア的立場を強調して自己正当化をはかるために、ヘロドトスに吹き込んだ一連のプロパガンダである、と論じている¹⁸。これらの記事のうち、前 510 年頃に臣従を要求するためにマケドニアに派遣されたペルシアの7人の使節がアレクサンドロス1世によって殺害されたことを伝える①の記事には確かに不自然な箇所があり¹⁹、Borza 以外にもこれを創作と見なす研究者は多い²⁰。マケドニアの国内で起こったとされるペルシアの使節の殺害事件は、ギリシア世界に証人のいない、いわば「密室の出来事」であり、これがアレクサンドロス1世の創作だったというのは、ヘロドトスの記述に含まれる不自然な点などを考えれば、説得的であろう。

しかし、①と異なり、③④⑤⑦のエピソードは、いずれもペルシア戦争のさ

なか（前480～479年）にギリシア世界で起こった事件であり、③のテンペ峡谷に布陣するギリシア軍へアレクサンドロス1世が使者を派遣した一件や、⑤のアレクサンドロス1世が使節としてアテナイに派遣された一件などは、ギリシア世界に多くの証人が存在するつい最近の出来事である。エピソードの細部に潤色や誇張はあったとしても、果たして、このような周知の事実についてアレクサンドロス1世がでたらめを語り、ヘロドトスがそれらを記したと考えられるだろうか。Borzaが作り話として斥ける⑦のエピソードについては、Borzaの指摘するように²¹、プラタイアの戦い前夜にマケドニア王が単身馬を走らせてアテナイの陣営にやってくる高らかに演説して去っていった、という設定には確かに若干の疑問が残るが²²、少なくとも、ギリシア世界に多くの証人のいるペルシア戦争中の③④⑤のエピソードの本筋は事実として認めるべきであろう（Borzaも、③④⑤については認めている）。

そして、Borzaがアレクサンドロス1世の作り話として斥けている②のオリュンピア祭参加の一件も、③④⑤のエピソードと同様に、ギリシア世界においては周知の事実に含まれる事柄と言えるのである。

Ⅲ アレクサンドロス1世の「参加」について

アレクサンドロス1世のオリュンピア祭参加について、Borzaは、ヘロドトスの記事の最後の「第一位の者と互角の成績をあげた（松平訳による）（*συνεξέπιπτε τῷ πρώτῳ*）」という一節の意味が曖昧であることと、オリュンピア祭の優勝者リストにアレクサンドロス1世の名前がないことの二点を根拠にヘロドトスの記事の信憑性を疑い、前節で触れた①⑥⑦のエピソードと同じく、このエピソードは、ペルシア戦争においてペルシアにくみしたアレクサンドロス1世がペルシア戦争後に自らの親ギリシア的立場をアピールするために創作したプロパガンダである、と結論している²³。

Borzaが着目する *συνεξέπιπτε τῷ πρώτῳ* という一節は、議論の多いフレーズである²⁴。 *συνεκίπτεiv* という動詞は、通常は「合意に至る」「意見が一致する」の意で用いられる動詞であるが（e.g. Hdt. 1.206.3, 8.49.2, 8.123.2）、ヘロドトスは競技の文脈において、この動詞を他には一切用いていない。この一節の解釈については、「予選の第一組で走った」「第一位の者と同じ組の予選で走った」「第一位の者と賞を分け合った」「同着で一位となった」など諸説がある²⁵。 *τῷ πρώτῳ* をアレクサンドロス1世の走った予選の組についての言及ととり、

これを「第一組で」あるいは「第一位の者と同じ組で」と解釈する見解は、文法的には不可能ではないが、ヘロドトスが、アレクサンドロス1世のオリンピック祭参加という記念すべき出来事を語るにあたって、肝心のレースの結果でなく、どの予選の組で走ったかというようなことをわざわざ記したというのは不自然であろう²⁶。「第一位の者と賞を分け合った」という解釈も、オリンピック祭のスタディオン走の慣行に照らせば考えにくく、優勝者リストに彼の名前がないこととも矛盾する。

なお、競技の文脈における *συνεκρίπτειν* という動詞の類例は、プルタルコス『ストア派の自己矛盾について』の一節 (Plut. *Mor.* 1045 D) に見られる。プルタルコスは、前3世紀の哲学者クリュシッポスの言葉を引用し、「彼(クリュシッポス)は『判定について』のなかで、2人の競技者が同時に駆け込んでくる (*ὁμοῦ συνεκρίπτειν ἀλλήλοις*) という想定のもとで、審判はいかなる行動をとるのがふさわしいかを問題にしている」と記している。この例に照らせば、*συνεκρίπτειν* という動詞は、レースのような競技の文脈で「同時に駆け込んでくる」「同着となる」という意味で用いられるテクニカルタームであると解釈し、ヘロドトスの一節もこれと同じような意味ととらえるのがやはり妥当であろう²⁷。とすれば、第一位の者と同時に駆け込んできた、すなわち、「同着で一位となった」という解釈が最も適切である。

では、アレクサンドロス1世は「同着で一位となった」結果、どうなったのか。勝利を何よりも重んじるギリシア人の競技において、同着で引き分けのまま終わったとは考えにくく、決勝戦の再レースが行われたと想定するのが妥当である。古代ギリシアのスポーツの専門家である Harris は、ボクシング、レスリング、パンクラティオンのような格闘技における引き分けは、決勝戦後に両者が疲弊しており再試合が不可能であるという事情もあって、両者に冠が与えられたり、あるいは勝利が神に捧げられたりすることが多かったが、スタディオン走のような陸上競技における引き分けは、勝者が決まるまで再レースが行われるのが通例であった、と指摘している²⁸。とすれば、アレクサンドロス1世の場合、優勝者リストには名前がないことから、再レースの結果敗れたと考えるのが整合的な解釈であろう²⁹。決勝戦の再レースで敗れて惜しくも優勝を逃したからこそ、ヘロドトスは最終的な勝敗については明言せず、他に例のないこの曖昧な表現にとどめてアレクサンドロス1世の活躍を讃えようとしたと考えられる。そうすると、優勝者リストに名前がないこととヘロドトスの記事の内容との矛盾は解消される。いずれにせよ、優勝者リストに名前がないことと、

この一節の存在は、必ずしもアレクサンドロス1世の参加自体を否定する根拠にはならないであろう。

そして何よりも、オリュンピア祭はギリシア世界の「公」の場であり、その祭典にマケドニアの国王が参加したというのは、ギリシア世界における周知の事実のはずである。もし参加が事実でなかったとしたら、ヘロドトスはそれほどあからさまな見えすいた偽りを記すことができたであろうか。参加を積極的に否定するに足る材料がない以上、ヘロドトスの記したアレクサンドロス1世のオリュンピア祭参加は、やはり事実であったと考えたい。

なお、アレクサンドロス1世を讃えたピンダロスの断片 (Pind. fr. 120-121) は、オリュンピア祭やピュティア祭での勝利を讃える祝勝歌ではなく、頌歌に分類されるのが通例であるが、アレクサンドロス1世が決勝戦の再レースで敗れて優勝を逃したのだとすれば、勝利を讃える祝勝歌であるはずは勿論ない。ピンダロスが讃えている「うるわしい功績」が何をさしているのかは定かではないが、優勝には至らなかったもののマケドニア王にして初めてオリュンピア祭に乗り込んで活躍したアレクサンドロス1世の「偉業」を詠ったものとも考えることも可能かもしれない。また、「オリュンピアの競技にさえもいろいろな種目で活躍した」と伝えるユスティヌスの一節 (Just. 7.2.14) についても、アレクサンドロス1世がヘロドトスの伝えるスタディオン走以外の種目に出場したのかどうかを確かめるすべはないが、「勝利した」ではなく「活躍した」と記しているユスティヌスの一節は、「決勝戦の再レースの結果敗れた」という上の解釈と矛盾するものではない。

では、その「参加」はいつのことだったのか。前492年、前488年、前484年、前480年の各祭典は、ペルシア戦争のさなかであり、マケドニアはペルシアにくみしていたのであるから、除外できる。これまでのところ、諸家の見解は、前476年(第76回)³⁰、前496年(第71回)³¹、それ以前(前500年?)³²に三分されている。前476年説を強く唱える Badian は、この年のオリュンピア祭がペルシア戦争終結後の最初の祭典であり、ペルシア戦争で活躍したアテナイのテミстокレスが祭典で拍手喝采をあげたように (Plut. *Them.* 17.4)、パンヘレニックな気運が大いに高まった祭典であるから、アレクサンドロス1世がアルゴス人の血統を主張した舞台として最もふさわしいと考え、さらに、アレクサンドロス1世の参加が承認されたのも、ペルシア戦争中の彼の親ギリシア的な貢献に対する一種の褒美であった、と推測している³³。こうした政治的背景を考えれば、確かに前476年というのは魅力的な説である。

しかし、1 スタディオン (192.27m) の直線走路を全力疾走するスタディオン走が若者の競技であることと³⁴、アレクサンドロス1世自身の年齢を考えあわせると、前476年の祭典とするには疑問が残る。アレクサンドロス1世の生年は不明であるが、前述の前510年頃のペルシア使節団の殺害事件 (Hdt. 5.17-21) において、彼がペルシアの使節の殺害やその後の対処といった大きな役割を果たしたとヘロドトスが記述していることより、その時点でおそらく15歳にはなっていたであろうから (この殺害事件の記事がアレクサンドロス1世による創作であるとしても、その舞台とされた前510年頃に彼がまだほんの子供だったとは考え難い)、前520年代前半には誕生していたと思われる。とすると、前476年には50歳を過ぎていたことになり、若者の競技であるスタディオン走に参加したとは考えにくい。Badianは、アレクサンドロス1世がオリュンピア祭に参加したのはレースで勝利するためではなく、あくまでも、アルゴス人の血統を公に主張するためだったのであるから、50歳を過ぎた年齢であっても不自然ではない、と主張するが³⁵、仮にそうした目的のためだったとしても、50歳台の初老の国王が若者たちにまじってスタディオン走で競い合うというのは滑稽な感が否めないし、また、そのような年齢であれば、「同着で一位になる」ことも到底不可能ではないか。やはり、アレクサンドロス1世の年齢という要因を重視して、前496年あるいはそれ以前の祭典と考えるのが妥当であろう³⁶。

IV アレクサンドロス1世からフィリポス2世へ——結びにかえて

以上のことより、ヘロドトスの伝えるアレクサンドロス1世のオリュンピア祭参加のエピソードは、アレクサンドロス1世自身の作り話ではなく、事実に基づくものと考えべきである。アレクサンドロス1世は、前496年もしくはそれ以前のオリュンピア祭において、自らがアルゴス人の血統であることを主張し、それが承認されて参加を許されたのであろう。勿論、王家の血統についてのアレクサンドロス1世の主張の信憑性や、その主張をギリシア人たちが本当に信じたのかどうかは別問題であるが、ともかく、ギリシア人だけの祭典であり、ギリシア人のアイデンティティ形成において大きな意味を持ったオリュンピア祭に³⁷、マケドニア王アレクサンドロス1世がこのときギリシア人として参加を果たした、ということをここで確認しておきたい。

では、アレクサンドロス1世のオリュンピア祭への「参加」は、マケドニア史の文脈においてどのような意味を持つのだろうか。別稿で論じたように³⁸、マ

ケドニア王家は、前6世紀後半からのアテナイの僭主ペイストラトスの一族やペルシアとの接触により、マケドニアの領域を越えてギリシア世界という大きな舞台へと歩み出していく可能性を認識するに至った。アレクサンドロス1世の治世から確認できる、マケドニア王家が英雄ヘラクレスの系譜に連なるという喧伝は、ギリシア世界における自己の位置づけを必要とした王家が、自己の起源をギリシアの英雄伝説に求め、ヘラクレスに連なる系譜を主張するという形で英雄伝説を能動的に受容した結果と考えられる。アレクサンドロス1世が自らをアルゴス人の血統と主張して出場したオリュンピア祭は、マケドニア王家が前6世紀後半からギリシア世界における自己の位置づけを求めて形成していったアイデンティティが、ギリシア人に向けて初めて明確に示された場だったと解釈することもできよう。アレクサンドロス1世は、前492年のペルシアの将軍マルドニオスによる遠征の際にペルシアに臣従するに至ったと考えられており³⁹、ペルシア戦争ではペルシアにくみしたが、すでにそれ以前のオリュンピア祭において、マケドニア王家のギリシア人としてのアイデンティティがギリシア世界に向けて喧伝されていたのである。このことは、マケドニア王家のアイデンティティの形成というこれまであまり論じられていない問題を、ペルシア戦争を境に大きく変容をとげていったとされるギリシア人のアイデンティティという文脈のなかで考えていくうえで、重要なヒントを与えてくれるであろう。

そのアレクサンドロス1世の孫にあたるアルケラオス(在位前413～399年)についても、オリュンピア祭に参加したことを伝える史料が残っている。マケドニア王国の強化に力を尽くしたアルケラオスは、エウリピデスやアガトンをはじめとするギリシアの知識人や芸術家を宮廷に招いてギリシア文化の積極的な導入をはかった王としても知られているが、後3世紀のソリヌスは、アルケラオスがデルフォイとオリュンピアの祭典において四頭立ての戦車競走の種目で勝利をおさめた、と伝えている(Solinus 9.16)。アルケラオスのオリュンピア祭参加を伝える史料はこのソリヌスの一節のみで、同時代の史料はなく、また、優勝者リストにアルケラオスの名前は残されていないため、彼の参加を疑問視する見解が多い⁴⁰。

アルケラオスは、霊峰オリュンポス山の麓に位置し、マケドニア王国の国家的な聖地であるディオンにおいて、オリュンピア祭を範とした体育競技と演劇競演を含む大祭典を創始したことも知られている。この祭典は「ディオンのオリュンピア祭」と呼ばれ、マケドニアの最高神ゼウス・オリュンピオスと芸

術を司る9人の女神ムーサイを讃える国家的な大祭典となった。前335年、アレクサンドロス大王はペルシア遠征の出陣式として、9日間にわたるオリュンピア祭をディオンの盛大に催しており、ヘレニズム時代においてもアンティゴノス朝マケドニアによってディオンのオリュンピア祭の挙行は続けられていった⁴¹。

アルケラオスは、なぜこのディオンのオリュンピア祭を創始したのだろうか。ギリシア文化の導入に尽力したアルケラオスが、ギリシア人の民族的祭典であるオリュンピア祭に関心を寄せていたことは確かであろうが、彼が本場のオリュンピア祭に参加しなかった（あるいはできなかった）からこそ、本場のオリュンピア祭に対抗する目的でディオンのオリュンピア祭を創始した、と考えることもできるし、ソリヌスが伝えるように実際にオリュンピア祭に参加したアルケラオスが、その参加を記念して自国にもそれと似た祭典を創始した、と考えることもできる。アルケラオスに関しては、実際にオリュンピア祭に参加したことを示す確たる証拠は乏しいが、少なくとも、彼がオリュンピア祭に大きな関心と、おそらくは憧れにも似た感情を抱いていたことは確かであろう。

そのアルケラオスが前399年に暗殺されると、以後、フィリポス2世が即位するまでの約40年間、マケドニア王国は停滞期に陥る。前399年から数年の間に数人の王が並び立ち、前393/2年にフィリポス2世の父アミュンタス3世（在位前393/2～370/69年）が即位したのちも、イリュリア・オリュントス・スパルタ・アテナイ・テッサリア・テーベといった勢力にかわるがわる翻弄される時代が続くことになる⁴²。この時期のマケドニア王たちは、先祖のようにオリュンピア祭に関心を寄せてはいても、出場は果たせなかったのであろう。

そして前360/59年、イリュリア人との激戦で戦死した兄ペルディッカス3世の後を継いで即位したフィリポス2世は、ギリシア征服に乗り出していくのと同時に、即位後最初の祭典である前356年のオリュンピア祭に待ちかねたかのように参加し、先祖アレクサンドロス1世には果たせなかった「優勝」を見事勝ち得たのである。その前年にフィリポス2世と結婚し、このオリュンピア祭の優勝と時を同じくして息子アレクサンドロスを生んだエピルスの王女オリュンピアスは、ポリュクセナとミュルタレという2つの幼名で知られているが⁴³、彼女が3番目の名前である「オリュンピアス」という名を得るに至ったのは、この夏のオリュンピア祭での優勝と息子アレクサンドロスの誕生という輝かしい2つの慶事を祝してのことだったと推測されている⁴⁴。また、オリュンピア祭での優勝と同じ夏に誕生した息子にフィリポス2世が「アレクサンドロス」と名付けたのは、初めてオリュンピア祭に参加した遠い先祖アレクサンドロス1世

に因んでのことだったのかもしれない。

オリュンピア祭でたびたび優勝を勝ちとり、オリュンピアの神域にフィリペイオンを建立したフィリポス2世の行動の「原点」は、初めてオリュンピア祭への参加を果たしたアレクサンドロス1世にあったのであろう。治世を通じてのフィリポス2世のオリュンピアへの強い関心は、デルフォイのアンフィクティオニアの政治的活用によってギリシア征服をスムーズに進めたように、全ギリシア的な聖地で挙行されるギリシア人の祭典であるオリュンピア祭との絆を強調し、自らもギリシア人であることを巧みにアピールしてギリシア征服を進めるための「オリンピック外交」としての側面を有していたことも否定できない。しかし、フィリポス2世とオリュンピアの「関わり」のなかに見出せるのは、単なる征服の手段として便宜的に活用されたプロパガンダという有用性だけではない。実際、オリュンピアとの「関わり」は、フィリポス2世のギリシア征服において、デルフォイの場合のような直接的な政治的果実をもたらすものでは必ずしもなかった。その「関わり」の背景には、アイデンティティの確立を求めてギリシアの英雄伝説を受容して系譜を作りあげ、ヘラクレスに連なるその系譜をひっさげて意気揚々とオリュンピアに乗り込んでいったアレクサンドロス1世の時代以来、オリュンピア祭に憧れ続けたマケドニア王家の「伝統」が息づいていたのである。

フィリポス2世が即位するまでのマケドニア王国は、イリュリア人をはじめとする近隣諸部族からの国境の防衛に追われ、マケドニアの領域を越えた対外的発展を実際に望める状況にはなかった。しかし、すでにアレクサンドロス1世の時代から、マケドニア王家の目は全ギリシア的な聖地オリュンピアでの祭典への参加と、そしてその参加に象徴されるギリシア世界への本格的参入に向けられていたのである。そこに、約150年後のフィリポス2世によって始まるマケドニアの大々的なギリシア進出の「原点」を見出すこともできるのではないか。前356年のフィリポス2世のオリュンピア祭への参加は、マケドニア王家の長年の「伝統」が、王国の苦難の時期を経て再び前面に現れたことを告げるものであり、その長年の「伝統」の輝かしい結実である優勝は、その後のフィリポス2世のギリシア征服の着実な進展を約束するかのような出来事だったと言えるかもしれない。

【参考文献】

- Badian, E. (1982) "Greeks and Macedonians", in: *Macedonia and Greece in Late Classical and Early Hellenistic Times*, Washington, pp. 33-51.
- (1993) *From Plataea to Potidaea*, Baltimore.
- (1994) "Herodotus on Alexander I of Macedon: A Study in Some Subtle Silences", in: *Greek Historiography* (Hornblower, S. ed.), Oxford, pp. 107-130.
- Borza, E.N. (1982) "Athenians, Macedonians, and the Origins of the Macedonian Royal House", in: *Studies in Attic Epigraphy, History and Topography Presented to E. Vanderpool*, Hesperia Suppl. 19, pp. 7-13.
- (1990) *In the Shadow of Olympus: The Emergence of Macedon*, Princeton.
- (1993) "The Philhellenism of Archelaus", *Ancient Macedonia V*, pp. 237-244.
- (1999) *Before Alexander: Constructing Early Macedonia*, Claremont.
- Bosworth, A.B. (1988) *Conquest and Empire: The Reign of Alexander the Great*, Cambridge.
- Carney, E.D. (2000) *Women and Monarchy in Macedonia*, Norman.
- Dascalakis, A. (1965) *The Hellenism of the Ancient Macedonians*, Thessaloniki.
- Edson, C.F. (1970) "Early Macedonia", *Ancient Macedonia I*, pp. 17-44.
- Errington, R.M. (1981) "Alexander the Philhellene and Persia", in: *Ancient Macedonian Studies in Honor of C.F. Edson*, Thessaloniki, pp. 139-143.
- (1990) *A History of Macedonia*, Berkeley.
- Hall, J.M. (2001) "Contested Ethnicities: Perceptions of Macedonia within Evolving Definitions of Greek Identity", in: *Ancient Perceptions of Greek Ethnicity* (Malkin, I. ed.), Cambridge Mass., pp. 159-186.
- (2002) *Hellenicity: Between Ethnicity and Culture*, Chicago.
- Hamilton, J.R. (1969) *Plutarch Alexander: A Commentary*, Oxford.
- Hammond, N.G.L. (1979) (& Griffith, G.T.) *A History of Macedonia II: 550-336 B.C.*, Oxford.
- (1996) "The Early History of Macedonia", *AW 27*, pp. 67-71.
- Harris, H.A. (1962) "Notes on Three Athletic Inscriptions", *JHS 82*, pp. 19-24.

- Hatzopoulos, M.B. (1987) "Strepsa: A Reconsideration, or New Evidence on the Road System of Lower Macedonia", in: *Two Studies in Ancient Macedonian Topography*, Meletimata 3, Athens.
- Head, B.V. (1911) *Historia Numorum*, 2nd ed. Oxford.
- Heckel, W. (1981) "Polyxena, the Mother of Alexander the Great", *Chiron* 11, pp. 79-86.
- Heskel, J. (1987) *The Foreign Policy of Philip II down to the Peace of Philocrates*, Diss. Harvard Univ.
- Hill, G.F. (1906) *Historical Greek Coins*, London.
- How, W.W. & Wells, J. (1912) *A Commentary on Herodotus I, II*, Oxford.
- Le Rider, G. (1977) *Le monnayage d'argent et d'or de Philippe II frappé en Macédoine de 359 à 294*, Paris.
- Macurdy, G.H. (1932) *Hellenistic Queens*, Baltimore.
- Martin, T.R. (1985) *Sovereignty and Coinage in Classical Greece*, Princeton.
- Price, M. (1979) "The Coinage of Philip II", *Num. Chron.* pp. 230-241.
- Romano, D.G. (1990) "Philip of Macedon, Alexander the Great, and the Ancient Olympic Games", in: *The World of Philip and Alexander: A Symposium on Greek Life and Times* (Danien, E.C. ed.), Philadelphia, pp. 61-79.
- Roos, P. (1985) "Alexander I in Olympia", *Eranos* 83, pp. 162-168.
- Rosen, K. (1978) "Die Gründung der makedonischen Herrschaft", *Chiron* 8, pp. 1-27.
- Scaife, R. (1989) "Alexander I in the Histories of Herodotus", *Hermes* 117, pp. 129-137.
- Sinn, U. (2000) *Olympia: Cult, Sport, and Ancient Festival*, Princeton.
- Thomas, R. (2001) "Ethnicity, Genealogy, and Hellenism in Herodotus", in: *Ancient Perceptions of Greek Ethnicity* (Malkin, I. ed.), Cambridge Mass., pp. 213-233.
- Thompson, M. (1982) "The Coinage of Philip II and Alexander III", in: *Studies in the History of Art X*, Washington, pp. 113-121.
- Yardley, J.C. & Heckel, W. (1997) *Justin: Epitome of the Philippic History of Pompeius Trogus I: Alexander the Great*, Oxford.

- 澤田典子 (1993) 「フィリポス 2 世の対ギリシア政策」『史学雑誌』102-7, 1-41 頁。
——— (2004) 「ヘレニズム世界とオリンピア」『古代オリンピック』(桜井万
里子・橋場弦編) 岩波新書, 162-179 頁。
——— (2007) 「古代マケドニア王国の建国伝説をめぐって」『古代文化』58-3
(掲載予定)。
藤縄謙三 (1989) 『歴史の父ヘロドトス』新潮社。
森谷公俊 (1995) 「ヘロドトスにおけるマケドニア王国像」『帝京史学』10, 1-23
頁。

註

- ¹ Hamilton (1969) pp. 7-8; Yardley & Heckel (1997) p. 295.
- ² オリンピア祭において、富裕層の競技である競馬種目（騎馬競走や戦車競走）では、勝利の栄冠は騎手や御者ではなく馬主に与えられ、優勝者リストに記されるのも馬主の名前であった。Sinn (2000) p. 43.
- ³ Hill (1906) no. 44, pp. 80-83; Head (1911) fig. 136. なお、プルタルコスの一節 (Plut. *Mor.* 104A-B) には、アレクサンドロスの誕生と同時に届いた吉報はオリンピア祭の戦車競走での優勝の報であった、とあり、ユスティヌスの一節 (Just. 12.16.6) にも戦車競走とあるが、フィリポス 2 世の銀貨の意匠との一致を重視し、Plut. *Alex.* 3.8 の記事に従って前 356 年の優勝は騎馬競走だったと考えるのが通例である。Hamilton (1969) p. 9; Romano (1990) p. 65; Yardley & Heckel (1997) p. 295.
- ⁴ Hammond (1979) pp. 664-665; Romano (1990) p. 65.
- ⁵ Hill (1906) no. 43, pp. 80-83; Head (1911) fig. 135, pp. 222-224; Hammond (1979) pp. 663-667. 「フィリペイオイ」の意匠は、ヘレニズム世界で人気を博し、そののちケルトやダキアの貨幣にも大きな影響を与えたことが知られている。Hill (1906) p. 83; Thompson (1982) p. 116. フィリポス 2 世の貨幣については、Le Rider の記念碑的大著 (Le Rider [1977]) が最も詳しい。Price (1979) pp. 230-241; Martin (1985) pp. 271-292 も参照。
- ⁶ フィリペイオンについては、澤田 (2004) 162-171 頁を参照。
- ⁷ フィリポス 2 世とデルフォイの関わりについては、澤田 (1993) 27-28 頁を参照。
- ⁸ フィリポス 2 世は、前 356 年にカルキディケ連邦と同盟を締結するにあつ

- て、デルフォイの神託を仰いでいる。Tod 158 ll. 7-8, 12-17.
- ⁹ 訳文は、松平千秋訳『ヘロドトス 歴史』(岩波文庫、1972年)による。
- ¹⁰ マケドニアの建国伝説については、澤田(2007)を参照。
- ¹¹ ピンダロスの断片の訳文は、内田次信訳『ピンダロス 祝勝歌集/断片選』(京都大学学術出版会、2001年)による。Hammond (1979) p. 60は、「いろいろな種目で活躍した」というユスティヌスの一節から、アレクサンドロス1世はスタディオン走だけでなくペンタスロンにも参加したと推測し、ピンダロスの断片はそのペンタスロンでの勝利を讃えた祝勝歌であると論じているが、史料的な根拠はない。もしアレクサンドロス1世がペンタスロンで優勝したなら、ヘロドトスがそれに触れていないのは不自然であろう。Dascalakis (1965) pp. 166-167も、ピンダロスの断片をオリュンピア祭での勝利に関連づけている。
- ¹² e.g. Dascalakis (1965) pp. 158-159; Edson (1970) p. 37; Hammond (1979) p. 60; Badian (1982) pp. 34-35; Roos (1985) pp. 162-168; Scaife (1989) pp. 133-134; Errington (1990) p. 9; Romano (1990) pp. 64-65; Thomas (2001) p. 219; 藤縄 (1989) 240頁。
- ¹³ Borza (1982) pp. 9-11, (1990) pp. 80-84, 102-110.
- ¹⁴ 近年は、Scaife (1989) や Badian (1994) をはじめ、ヘロドトス自身の意識や主観というフィルターを通して、アレクサンドロス1世についてのヘロドトスの記述を分析するといった傾向の研究が多い。
- ¹⁵ e.g. Dascalakis (1965) p. 148; Hammond (1979) pp. 3, 98-99, (1996) p. 67; Borza (1982) pp. 8-9, (1990) p. 80, (1999) p. 5. Scaife (1989) p. 129は、ヘロドトスがアレクサンドロス1世に会ったという通説を疑問視している。
- ¹⁶ なお、後10世紀末に編纂された『スウダ辞典』の「ヘラニコス(前5世紀のミュティレネの歴史家)」の項目に、「エウリピデスとソフォクレスの時代に、ヘラニコスはヘロドトスとともにマケドニア王アミュンタスのもとに滞在した」という記述があり、これも、ヘロドトスがマケドニア王の宮廷に滞在したことの根拠として引かれることがある。しかし、前497年頃に亡くなったアミュンタス1世の宮廷に、前480年代半ばに生まれたヘロドトスが滞在していたはずはなく、エウリピデス(前485頃～406年)とソフォクレス(前496頃～406年)の生没年から考えても、明らかにマケドニア王の名前が誤って伝えられている。この「アミュンタス」という記述は、「アレクサンドロス(1世)」「ペルディッカス(2世)」「アルケラオス」のいずれかに修正すべき

とされている。Dascalakis (1965) p. 216 n. 2; Scaife (1989) p. 129 n. 3; Hammond (1996) p. 67 n. 1; Hall (2001) p. 177 n. 79. この『スウダ辞典』の一節は、あまり信憑性の高い記事ではないが、ヘロドトスとマケドニア王の宮廷の近い関係を示唆する史料と言える。

¹⁷ Errington (1981); Borza (1990) pp. 102-110; 森谷 (1995). Dascalakis (1965) pp. 177-198; Badian (1994); 藤縄 (1989) 236-244 頁も参照。

¹⁸ Borza (1982) pp. 9-10, (1990) pp. 80-84.

¹⁹ 臣従を要求するためにメガバソスがマケドニアに7人の使節を派遣し、王アミュンタス1世はやむなく要求に応じるが、息子のアレクサンドロス1世が宴席で使節たちを殺害する。その後ペルシアは使節団の搜索隊を派遣するが、アレクサンドロス1世は搜索隊の隊長ブバレスに姉妹ギュガイアを与えて事なきを得た、という有名なエピソードである。ペルシアの使節団の7人という数が多いことや、若い王子が父王をさしおいて宴席をとりしきり、使節団の殺害と搜索隊の懐柔を一手に引き受けていることなどが、不自然な点として指摘されている。このエピソードは全体としては作り話であるとしても、そのなかで史実であると認められる「マケドニアのペルシアへの臣従」と「ペルシアの高官ブバレスとアレクサンドロス1世の姉妹ギュガイアの結婚」が実際に起こったのはいつか、という点に関して研究者の意見は分かれている。「臣従」については、Errington や Borza を含む多くの研究者は、前492年のマルドニオスの遠征 (Hdt. 6.44) の際と考えるが、Badian (1994) pp. 107-113 は、前511年頃にアミュンタス1世が息子のアレクサンドロス1世を使節としてペルシア側に送り、ブバレスとギュガイアの結婚をとりはからって臣従するに至った、と推測している。

²⁰ Errington (1981) p. 140 を参照。

²¹ Borza (1982) pp. 9-10, (1990) p. 110. これに対する批判は、Scaife (1989) p. 131 n. 7.

²² 森谷 (1995) 14-17 頁。

²³ Borza (1982) pp. 10-11, (1990) p. 110.

²⁴ この一節がのちの時代の挿入であるという可能性も指摘されている。Scaife (1989) p. 133 n. 15.

²⁵ Roos (1985) pp. 165-166 を参照。

²⁶ Roos (1985) p. 165.

²⁷ Badian (1982) pp. 35, 45 n. 15; Borza (1982) p. 10 n. 11.

- ²⁸ Harris (1962) pp. 21-24. Harris は、後 3 世紀半ばの小アジアのアナザルボスの碑文 (*SEG XII 512 ll. 12-13*) の一節に現れる、2 人の走者が 4 回同着となり、5 回目のレースでやっと勝敗が決したというスタディオン走の例を詳細に検討している。
- ²⁹ Roos (1985) pp. 164-167. cf. How & Wells (1912) II p. 8.
- ³⁰ Rosen (1978) p. 7; Badian (1982) p. 34, (1993) p. 122.
- ³¹ Dascalakis (1965) p. 159; Edson (1970) p. 37.
- ³² Hammond (1979) p. 60; Roos (1985) p. 167; Errington (1990) p. 9.
- ³³ Badian (1993) p. 122 は、それに加えて、マケドニアをアテナイのギリシア北部への拡大の足場とすることを企てたテμισトクレスが、祭典においてアレクサンドロス 1 世の参加を承認するよう尽力した、と推測している。
- ³⁴ Dascalakis (1965) p. 159; Roos (1985) p. 167.
- ³⁵ Badian (1993) p. 222 n. 31.
- ³⁶ 前 496 年であれば、アレクサンドロス 1 世は 30 歳台前半と考えられる。前 496 年以前という説をとる論者は、30 歳台前半でもスタディオン走には年をとりすぎていることをその理由としているが、Dascalakis (1965) p. 159 は、マケドニア固有の軍事訓練ゆえ、アレクサンドロス 1 世は年齢の割には十分に若さを保っていた、と論じている。
- ³⁷ ギリシア人 (ヘレネス) のアイデンティティの確立においてオリュンピア祭が果たした役割については、Hall (2002) pp. 154-168.
- ³⁸ 澤田 (2007) 第Ⅲ節。
- ³⁹ マケドニアがペルシアに臣従した年代については議論が多いが、前 492 年のマルドニオスの遠征に関するヘロドトスの記述における「(マルドニオスは) 陸上部隊によってマケドニア人を討ち、すでにペルシアの隷属下にある民族にこれを加えた」(Hdt. 6.44) という一節に基づいて、前 492 年とする見解が有力である。Errington (1981) pp. 140-143; Borza (1990) pp. 102-105; 森谷 (1995) 5-9 頁。註 19 も参照。
- ⁴⁰ e.g. Badian (1982) pp. 35, 46 n. 16; Heskell (1987) p. 92 n. 66; Borza (1990) pp. 174-175, (1993) p. 241 n. 15. アルケラオスの参加を事実と見なすのは、Hammond (1979) p. 150; Errington (1990) p. 26; Romano (1990) p. 65.
- ⁴¹ Dem. 19.192; Diod. 16.55.1, 17.16.3-4; Arr. *Anab.* 1.11.1. マケドニアの「オリュンピア祭」が史料に現れるのは、前 348 年にオリュントスを陥落させたフィリポス 2 世がその勝利を祝して盛大な「オリュンピア祭」を挙行了たことを

伝える史料 (Dem. 19.192; Diod. 16.55.1) が最初であるが、これらの史料には、開催された場所やその祭典を創始した人物の名前は触れられていない。前 335 年にアレクサンドロス大王がペルシア遠征の出陣式として挙行した「オリュンピア祭」については、ディオドロスは「アルケラオスの創始した祭典がディオオンで催された」と記し (Diod. 17.16.3-4)、アリアノスは「アルケラオスが創始したディオオンでの供犠とは別に、オリュンピア競技祭がアイガイで開催された」と記している (Arr. *Anab.* 1.11.1)。アリアノスが「アイガイ」と記していることから、アルケラオスがディオオンでの祭典を創始した後も、旧都アイガイで祭典が挙行されていたとする見解もあるが (Hammond [1979] p. 150 n. 1)、オリュンピア祭がアイガイで開催されたというのはアリアノスの誤解によるものとする見解が有力である。e.g. Badian (1982) p. 46 n. 17; Bosworth (1988) p. 97; Borza (1990) pp. 173-174, (1993) pp. 240-241. なお、王国の飛躍的發展をもたらしたとされるアルケラオスの治世については、このオリュンピア祭の参加と同様に不明な点が多い。通常アルケラオスの功績と考えられているアイガイからペラへの遷都も、史料には直接の言及はなく、アルケラオスによる新都の造営を明確に示す遺構も発見されていないため、確かではない。アルケラオスが宮廷 (アイガイかペラかは不明) にギリシアの芸術家たちを招いたこと、エウリピデスがペラで晩年を過ごしたこと、ペラ遷都は王国の再編と強化をはかったアルケラオスの大改革の一環と考えるのが妥当であることなどから、アルケラオスの功績と見なすのがほぼ通説となっているが、Hatzopoulos (1987) pp. 41-44 のように、前 393 / 2 年に即位したアミュンタス 3 世の功績と考える研究者もいる。

⁴² Borza (1990) pp. 177-197.

⁴³ Plut. *Mor.* 401A-B; Just. 9.7.13.

⁴⁴ Macurdy (1932) p. 24; Heckel (1981) pp. 84-85; Carney (2000) p. 33.

*本稿は、平成 18 年度文部科学省科学研究費補助金 (萌芽研究) による研究成果の一部である。